

音楽の要素の精選化と思考の焦点化で主体性を育む中学校音楽科授業 —ねらいの明確化とポイントの具体化で深い学びを実現させる活動—

森 隆平* 新山王 政和**

*附属名古屋中学校

**音楽教育講座

Junior High School Music Classes to Foster Independence through selected of Musical Elements and Focused Thinking — Activities to deep learning by clarifying objectives and focusing on specific points —

Ryuhei MORI* Masakazu SHINZANO**

*Nagoya Junior High School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan

**Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords：音楽の要素 思考の焦点化 深い学び

本報告書は、Ⅰを実践者の森隆平が執筆し、
Ⅱを共同研究者の新山王政和が執筆している。

Ⅰ 2年生を対象にした研究実践

題材名：ギターに親しもう

1 題材の構想

(1) 題材観

本題材は、カノン進行が用いられたポップス曲を中心に、コードに合わせて「リズム」を工夫した伴奏をギターで演奏する表現活動である。カノン進行とは、バロック時代に活躍したドイツの作曲家パッヘルベルが作曲した「カノン」に用いられるコード進行のことで、これはクラシック音楽のみならず、現代の様々なポピュラー音楽にも取り入れられ、数々のヒット曲を生み出している。その理由として、簡易なコードで構成されていることや、親しみやすいコード進行であることが挙げられる。また本題材で扱うギターは、クラシック音楽を始め、ジャズやポップス等といった幅広いジャンルで用いられており、生徒にとっても馴染みのある楽器の一つと言える。従って、日頃から様々な音楽に親しんでいる生徒にとって、興味・関心を抱きやすい

教材といえる。

これまでに生徒たちは、「速度」や「強弱」といった様々な音楽を形づくっている要素の働きが、曲と関わっていることについて学んできた。本題材では、カノン進行に合わせて、ストローク奏法を用いて、「リズム」を工夫することで様々な曲想を表現できることに気付かせ、思いに合った伴奏を工夫させていく。その際、音楽を形づくっている要素を「リズム」に精選することで、思考する対象を焦点化し、学習のねらいを明確にすることで、生徒の主体性を発揮させていく。また、「表現のめあて」を決定していく上で、具体的な工夫するポイントを提示することで、学びの文脈に乗せ、深い学びを実現し、音楽の意味や価値を創造させていくことをねらいとする。

(2) 指導観

「つかむ場」では、始めにクラシックギターやフォークギター、エレキギター等といった様々な種類のギターの演奏動画を鑑賞したり、実際に楽器に触れたりしながら、ギターの特徴や「リズム」の働きと曲想との関わりを捉えさせるとともに、ギターの演奏に対して関

心をもたせていく。そして、題材の課題『リズム』を工夫して、ギターで演奏しよう」を提示し、ギターを用いてリズム伴奏を工夫していく活動に取り組むことや学習計画を確認することで、学習に見通しをもたせていく。

次に、カノン進行が用いられている楽曲を紹介し、コード進行の特徴と曲想との関わりについて捉えさせていく。ポピュラー音楽が、実は同じコード進行によって構成されていることに気付かせるとともに、「自身で演奏する曲を選択させていくこと」で、学習に対する関心を高めていく。そして、一つひとつのコードをギターで演奏しながら確認し、コードの押さえ方を身につけさせていく。その際、コードは基本的には3つの音から構成されていることに気付かせ、個々の実態に合わせて、「押さえる弦は省略しても良いこと」とし、さらに、「カノン進行が用いられている1フレーズを演奏すること」で、演奏に苦手意識のある生徒に対して、学習に前向きに取り組めるようにさせていく（個別最適な学び）。

続いて、ストローク奏法を紹介し、4ビートや8ビートといったいくつかのリズムパターンを聴かせ、「リズム」の働きと曲想との関わりについて捉えさせていく。そして、ストローク奏法について、ギターで演奏しながら確認していく。最後に、具体的な工夫するポイント「ビートを生かして、思いに合ったリズム伴奏を工夫すること」を提示し、「表現のめあて」を設定させる。

「つくる場」では、ストローク奏法を用いてリズム伴奏を工夫させていく。その際、具体的な工夫するポイントを意識させていくことで、思考する音楽要素の働きを焦点化して学習を進めさせていく。また、グループでリズム伴奏の工夫についてお互いに意見を交流させながら、試行錯誤させていく。さらに、中間発表会ではグループで意見交換させたり、ICT機器で録音をし、演奏を見直させたりしていく。「リズム」の働かせ方を友達と創意

工夫しながら「表現のめあて」を決定していく過程において、音楽の意味や価値を創り出していく（協働的な学び）。

「ふり返る場」では、発表会を行い、お互いの作品のよさを捉えさせ、最後に題材全体を振り返ることで、音楽を形づくっている要素の働きについて、実感を伴わせながら理解させ、今後の音楽表現に生かせるようにしていく。以上のように、ギターを用いて、思いに合ったリズム伴奏を工夫する活動を通して、音楽の意味や価値を創り出し、深い学びを実現していく。

(3) 題材の目標

〔知〕「リズム」の働きと曲想との関わりについて理解する。

〔知〕「リズム」の働きを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。

〔思〕「リズム」の働きを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、試行錯誤しながら、どのように音楽表現するかについて考え、思いや意図をもつ。

〔態〕「リズム」の働かせ方の多様性に関心をもち、表現の工夫を試行錯誤したり、振り返ったりしながら、主体的・協働的に学習活動に取り組む。

2 研究実践の報告

(1) つかむ場（第1時～第3時）

第1時では、様々なギターの演奏を鑑賞し、ギターの「音色」や「奏法」の違いによる音楽の特徴を捉えていた。また、弾き語りの演奏を視聴した際に、「曲の雰囲気が場面ごとに変わるのはなぜか」と問いかけたところ、ストローク奏法の「リズム」の工夫に着目していた。そこで、課題『リズム』を工夫して、ギターで演奏しよう」を提示し、学習の見通しをもたせた。その後の試奏では、ギターに触れるのが初めての生徒が多かったが、親しみある楽曲を演奏できる期待の気持ちもあり、ギターに対する興味や関心を高める姿がみられた。第2時では、カノン進行が用いられた

ポップスをメドレーにした演奏を聴かせ、「全ての曲に共通することは何か」と問いかけ、全ての和音進行が同じことを捉えていた。その後、カノン進行の特徴について、簡単なコードが用いられていることや、ベース音が順次進行で循環コードであることから、演奏に親しみやまとまりを感じやすいことに気づいていた。その後、コードの押さえ方を確認した場面では、コードを押さえることに四苦八苦していたが、簡略化したコードの押さえ方も提示し、自分の技量に合わせて選択して練習に取り組んでいた。そして、カノン進行の曲一覧の中から自分が演奏したい曲を選択したことで、学習に対する意欲を高めていた。第3時では、様々なビートのリズムパターンを鑑賞し、「2分音符や4分音符が用いられたゆったりしたビートだと穏やかな感じがする」や「8ビートや16ビートだと、盛り上がりを感じられ楽しい感じがする」等、「リズム」と曲想との関わりを捉えていた。その後、具体的な工夫するポイント「ビートを生かして、思いに合ったリズム伴奏を工夫すること」を提示し、「表現のめあて」を設定した。「最初は昔を思い出す感じにしたいから2ビートで、その後、徐々にビートを細かくし、思い出が鮮明になる様子を表現したい」等、個々が表現したい「思い」に合わせて「リズム」をどう工夫したいか、考えをもった。

(2) つくる場 (第4時~第6時)

第4時では、自ら設定した「表現のめあて」に沿って、リズム伴奏を工夫しながら、演奏の技能を高めていた。4人グループになって学習を進めていく中で、最初は、コードの音がうまく響かなかったり、コードチェンジに手間取ったりしていたが、お互いにアドバイスをし合いながら課題を解決していた。第5時では、中間発表会を行い、グループで意見交流した。「元気さを出すなら、歌詞と歌詞の間で8ビートを刻んでみたらどうか」といった相手の思いに合ったアドバイスをする

姿が見られた。第6時では、中間発表会のアドバイスや録画した演奏を参考にしながら、作品や演奏を見直し、最後に「表現のめあて」を決定した。多くの生徒は、最初に設定した「表現のめあて」をより具体的に記述しており、考えの深まりが見られた。

(3) ふりかえる場 (第7時)

第7時の発表会では、お互いの演奏の良い点や改善点等を意見交流し、多様な音楽表現の良さを味わっていた。題材の振り返りでは、「ビートを工夫することで、曲の感じが変化することがわかった。自分の表したいイメージに合わせて、リズムを細かくしたりゆったりしたりしていききたい」といった記述が見られ、「リズム」の働きについて理解を深めていた。

3 成果と課題

本題材における音楽を形づくっている要素を「リズム」に精選したことで、思考する対象を焦点化し、学習のねらいを明確にすることにつながり、生徒の主体性を発揮させることができたと考える。また、「表現のめあて」を決定していく上で、具体的な工夫するポイントを提示することで、学びの文脈に乗せ、深い学びを実現することができたと考える。今後は、他の題材においても指導計画を見直し、生徒の主体性を発揮させることで、深い学びを実現していくとともに、3年間を見通した系統的なカリキュラム作成を目指していきたい。

Ⅱ 共同研究者による補足説明と所感

1 協議会の質問に対する新山王の補足説明

(1) Q1：要素の指導ではどこまで絞るべきか？

A1：要素によっては、グラデーションのように関わり合うものや（音の高さ⇔音色⇔強弱など）、単体でも知覚できるもの（リズム、旋律、形式、構成など）があるため、筆者は「焦点化する」や「注目する」ように、取り

上げる要素をデフォルメして指導している。例えば調味料の塩や醤油も関わり合って作用するが、「塩のよさ、醤油ならではの役割」のように、それぞれの使い分け方へ注目させるなどして生徒自身に気づかせて、感じ取らせるのと同じである。つまり、焦点化する要素以外は固定した状態で焦点化する要素だけを変化させることで、その様相の違いに気付かせて（知覚）、感じ取らせるようにしている（感受）。

(2) Q2：弦の数が少ないウクレレではどうか？

A2：今回は演奏技能だけを求めたものではなく、和音の響きや和声進行も意識しながら、自分の思いや意図にあったギターのストローク（リズムパターン）を工夫するという「リズム創作」でもあった。実際に生徒は6本の弦を全て使ったり数本しか使わなかったり、アップで弾いたりダウンで弾き下ろしたりすることで和音の響き方が変化することを知覚・感受しながら使い分けていた。器楽と創作を一体化させて、さらに音を並べるだけでなく知覚・感受を通したリズムパターンを創意工夫するという、興味深い実践だった。

2 新山王による所感

(1) 「知の創造」≠「知っているだけの知識」

タブレットの活用は「個別最適な学び」として主体的な学びや対話的な学びにも有効であり、さらにギター演奏の技能にも結び付けたことで、生徒は知っているだけの暗記知識から、気づいて分かる知識（知覚）や感じ取ることで理解できる知識（感受）へ、そして技能も「できた／できない」ではない活用可能な技能へ高めることができていた。

(2) 主体的な学び、対話的な学び、深い学び

タブレットを用いた個別最適な学びの積み重ねにより、自ら主体的に学びに向かおうとする姿が見られ、その過程で各自が思い描いた「思いや意図」を表すために取り組んだ創意工夫について互いにアドバイスし合う対話

的な学習も加えることで、協働的な学びへと高まっている。本実践で「3つの場」を設定したことで「できるようになれば、さらに色々なことを試してみたいくなる」のように学びのステージが逆スパイラルで上がっていく様子を確認することができた。「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」の3つが関連し合うことで、学びが次々とステップアップしていくことを示した、個別最適な学びと協働的な学びを両立させようとする試みである。

(3) 「耳が育つ」≠「耳を育てる」

生徒が主体的・対話的に学習活動へ取り組めるような場を適切に設定して自ずと学習活動を深めることができれば、結果として「耳が育つ」こと、つまり教師主導の直接指導で耳を育てることと同じ教育効果を得られることを示した。耳を育てることと、様々な活動を用意して“自分ごと”として生徒の耳が育つのを見守ることのバランスを大切にしたい。（生徒が主体的に取り組む習得・活用・探求）

(4) 教師自身の音楽観を広げる

「ギターのストロークパターンの工夫を通してリズムパターンを考える」という器楽とリズム創作、さらにギター音楽を聴いてその曲想や雰囲気、和音の響きも感じ取る鑑賞の活動とも関わらせた意欲的な研究実践であった。特に次の点を高く評価したい。

- ①演奏技能だけを求めたものではないこと。
- ②手拍子や打楽器で行うことの多いリズム創作をギターのストロークで試みたこと。
- ③ギター音楽を聴いてその曲想や雰囲気を感じ取らせた上で、6本の弦が醸し出す響きや音色も考えながら試行錯誤を重ねたこと。

(5) 研究実践全体を俯瞰して

器楽（ギター）を主眼としながら、創作と鑑賞の視点も絡ませることで「弾く・聴く・創る」を関連付けた音楽全体を対象とする活動が構成されていた点を高く評価している。